慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウリ像をめぐる絡み合いの歴史人類学 : ビスマルク群島ニューアイルランド島の造形物に関する予察
Sub Title	Historical anthropology of entanglement surrounding "Uli" figures : review of carved objects from New Ireland, Bismarck archipelago
Author	山口, 徹(Yamaguchi, Toru)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.1/2/3 (2015. 7) ,p.401(401)- 439(439)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第2分冊) 論文 民族学考古学 付表
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0401

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウリ像をめぐる絡み合いの歴史人類学

――ビスマルク群島ニューアイルランド島の造形物に関する予察――

山口　徹

慶應義塾大学には、メラネシアの島々で収集された民族資料が二千点余りある。主たる資料は、戦前・戦中に南洋群島で製糖業を展開していた南洋興発株式会社社長、松江春次氏のコレクションであった。そのうち少なくとも一五〇～三〇〇点ほどは、一九世紀末から二〇世紀初頭にビスマルク群島で小嶺磯吉氏が収集した資料と考えられる[1]。なかには両性具有の祖霊像が含まれている。顎鬚を蓄えた大顔や頭上の半月状髪飾り、どっしりと踏ん張る短脚から判断して、ニューアイルランド島の中部内陸、熱帯雨林に覆われたレレト丘陵（Lelet）でかつて製作されていたウリ像に間違いない（図1）。ニューアイルランド島はニューギニア本島の北東に位置し、ニューブリテン島、アドミラルティ諸島とともにビスマルク群島を構成する（図2）。一八八四年から一九一四年までドイツ国の保護領だった地域である。ニューアイルランド島は、地質学的には火山起源の地形と隆起石灰岩からなる。南東から北西に約三〇〇kmに渡ってのびる細長い島だが、最高標高が一三〇〇mほどあり、切り立った山並みが中央部をはしる。人びとのコミュニケーションを妨げる険しい地形が影響してか、島のなかにはこれまでに一九もの言語集団が確認されている。ウリ像はその一つ、マダック（Madak）の人々が製作したと言われている。

こうした造形物が「今ここにある」ことを理解するためには、製作／使用にかかわる現地のコンテキストに加えて、植民地的状況のなかで生じていた収集の現場の様相を把握する必要がある。本稿では、慶應義塾に所蔵されるウリ像を出発点に、民族誌的情報を整理した上で、

図１　慶應大所蔵ウリ像（左 ME-10201：150cm、中央 ME-10202：155cm、右 ME-10203：156cm、慶應義塾大学出版会・渋川豊子氏撮影）

西欧の収集者にかかわるコロニアル・ヒストリーや博物館の近代史研究を概観し、多様な立場にあった人々のあいだの絡み合いを析出する足掛かりとしたい。

一　ウリ像の民族誌

キョウチクトウ科アルストニア属（*Alstonia*）、おそらくは軽軟材の *A. Scholaris* から彫り出された一木造の祖霊像で、慶應義塾は三体のウリ像を所蔵する。タカラガイの殻とサザエの蓋で眼球が表現され、赤土（赤）・木炭（黒）・石灰（白）とクリソバラヌス科パリナリ属（*Parinarium laurinum*）の樹脂を混ぜ合わせた三種類の顔料で彩色されている。博物館・美術館や個人のコレクションとして、同様のウリ像が欧米を中心に二五五体あると言われているが、植民地化の過程でウリ像にかかわる知識は失われてしまった（Gunn & Peltier 2006:172）。文化史的な関心から、ニューギニア本島やオセアニアの島々、インドやインドシナ半島まで他地域の彫像とウリ像の類似性を指摘する論考が散発的に発表されることは

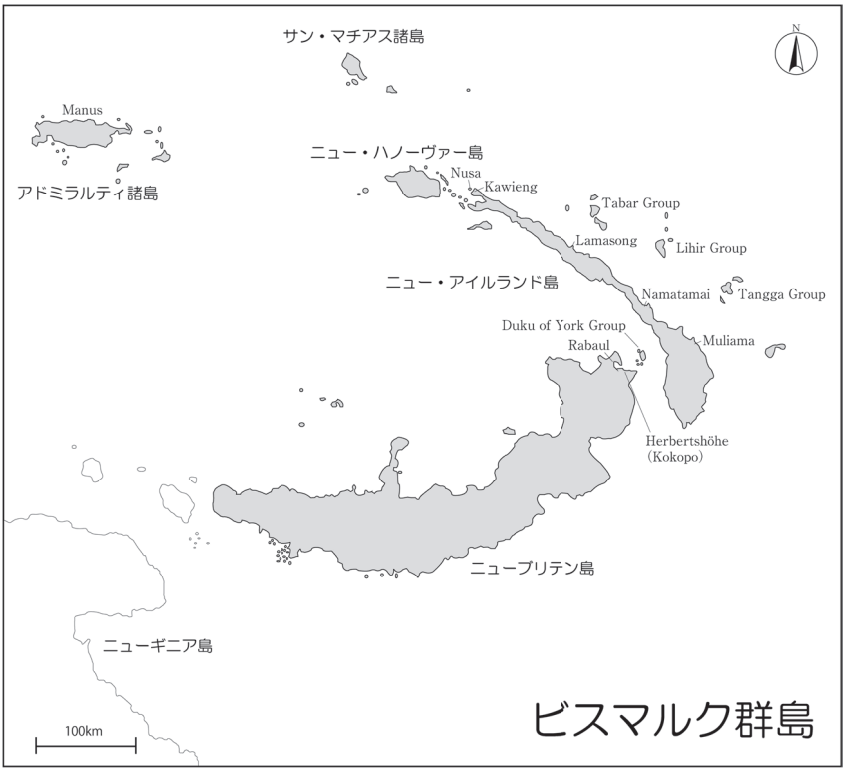

図２　ビスマルク群島の島々

あったが（Krieger 1932:22; Speiser 1966:154-5; Fraser 1962:175）、ウリ像の製作や儀礼的使用が残っていた二〇世紀初頭の民族誌的情報は、ドイツ人研究者のクレイマー（Augustin Krämer）による報告にほぼ限られてしまう[2]。

クレイマーはもともとドイツ海軍の軍医で、博物学者でもあった。一八九〇年代中ごろから一九一一年にかけて、独領ミクロネシアやニューギニアへの五回の調査航海へ参画し、その過程で民族学的関心を高めていった（Mönter 2010:130-172）。その後一九一一年には、シュトゥットガルトのリンデン博物館で科学担当理事に就任し、一九三一年にはテュービンゲン大学民族学研究所の創設にもかかわった研究者である。ニューアイルランド島には、ドイツ海軍とベルリン民族学博物館が企図

した調査隊を途中から率いて一九〇八年一一月から一九〇九年六月まで調査に入った。七ヵ月の滞在期間中には、徒歩と船舶で島の東海岸と西海岸を踏査し、海岸線に点在する村々の位置を地図に落としながら、儀礼や社会組織にかかわる情報を集めて回った。特に、ウリ像の製作地特定と造形表現の象徴的意味を解明することに関心があり、内陸のレレト丘陵踏査やレレト山登頂もはたしている。

調査拠点が置かれたラマソン村（Lamasong）は、ニューアイルランド島中部東海岸に位置し、レレト丘陵にも近い。クレイマーは、内陸の村からラマソンにやってきた彫刻師のラカム（Lakám）という男から、一九〇五年〜一九〇六年におこなわれた儀礼について聴取している（Krämer 1925; Gifford 1974:41-42）。その記録によると、ある偉大な首長の葬送儀礼を、ラマソン村のリプイ（Lipui）という首長が取り仕切った。儀礼は一三ヵ月にわたって断続的に行われ、周辺一〇カ村の首長たちが時どきに参列したという。女性や子供の入域が禁じられた男性宿の敷地で、一三節におよぶ一連の儀式が進められていった。第一節では、参列した一〇名の首長たちが見守るなか、亡くなった偉大な首長の頭蓋が埋葬された。節によっては、二頭から一〇頭のブタが演壇に並べられ、リプイの演説後に参加者の男たちへ分配された。一〇頭のブタの場合まず五頭が仰向けに並べられ、その上に残りの五頭が腹を下にして載せられた。最終盤の第一二節・第一三節は特に盛大で、男性宿の敷地外に舞踏会場が設けられ、女性の踊り手たちも加わり様々な集団舞踏が繰り広げられた。第一三節の最終日には、偉大なる首長の頭蓋が燃やされ、その灰は海に流されることによって葬送儀礼がすべて完了した。

ウリ像が姿を現すのは第五節からで、第六節の終わりまでに男性宿の敷地内に建てられたエアンコット（*eangkôt*）という名の小屋に一〇体が集められた。それぞれ姿が見えないように植物の葉で包まれて内陸から運ばれてきたウリ像で、おそらく儀礼に参列した首長一〇名の村々に対応していたと考えられる。第八・第九節には、男性宿の敷地をはみ出る大きな柵囲いが内陸の人びとによって作られ、そのなかでウリ像に彩色がほどこされた。最終節（第一三節）までに、その柵囲いのなかにウリ・マランガン（*uli-malanggan*）という名の一〇棟の小屋が建てられ、ウリ像が一体ずつ納められた。全ての儀式が終わると支払いの時となり、葬送儀礼を主催し

た首長リプイは、植物の繊維にビーズ状に連ねた貝貨を二〇尋から四〇尋ほど支払って、エアリク（*ealik*）と名付けられた新しいウリ像を手に入れている。亡くなったラマソン村の偉大な首長を表象するウリ像と考えられる。

クレイマーが記載した儀式のいくつかは、ニューアイルランド島北部やターバル諸島で今でも行われているマランガン儀礼の構成要素と類似する。マランガンは仮面や飾り板、そして一木造の彫像を用いる親族レベルの葬送儀礼で、半年から一年の期間をかけて一連の儀式がとり行われる（Gunn 1997; 南の会 1937:118-119）。ニューアイルランド島の母系社会は妻方居住で、婚入してきた夫たちが自分自身やその子供たちの立ち位置を高めるために、亡くなった姻戚の葬送に際して盛大なマランガン儀礼を開催しようと、出身親族の協力も得ながらお互いに張り合う。彼らは故人を崇め表象するために、専門の彫刻師に要請して出来るだけ立派なマランガン彫像を製作させる（Gunn 1997:38）。その準備に数週間から数ヵ月が費やされ、儀礼のクライマックスで彫像の表面に彩色がほどこされる（Gell 1998）。

マランガン彫像の製作は「皮膚（*tak*）をつくること」に喩えられる（Küchler 1992:96, 2002:112-3）。人は皮膚を重ねて成長する。系譜関係や個人の資質によって獲得した権威や権利が時どきの皮膚に刻まれる。彫像の多様な構成要素は故人が獲得してきた権威や権利の証であり、古いものから新しいものまで幾重にも重なる皮膚を透き通って身体の表面に浮かび上がってきた意匠として説明される。葬送儀礼は、故人に帰属していた諸権利が貝貨と引き換えに再分配される場でもあり、縁故者らは彫像の外観を儀礼の短いあいだに心像として記憶することで、継承の正当性を主張できるようになる。[3] 儀礼がすべて終わると、彫像は宿していた故人のウーネ（*une*）、すなわち力・経験・知識を失うと考えられており（Küchler 1992:97）、それゆえ破棄されて朽ちるか、儀式のなかで燃やされてしまう（Gell 1998:No.5016-5054）。

クレイマーが聞き書きしたラマソン村の葬送儀礼で、首長の頭蓋が最後に燃やされたことにも、同様の意味があったのかもしれない。ただし、マランガン彫像と異なり、ウリ像自体は破棄されなかった。儀礼後の扱いについてははっきりしないが、シュトゥットガルトのリンデン博物館が所蔵するウリ像は、収集されるまで男性宿の

梁に長らく置かれていたとの記録があり、黒く煤にまみれた状態で保存されている（Gunn & Peltier 2006:178）。ウリ像は、かつて村を率いた偉大な首長の表象として繰り返し使用されていたと考えて良い。マランガン彫像は、一木から彫り出されていくなかで故人のウーネが宿っていくと考えられているように（Küchler 2002:113）、ウリ像の場合は、儀礼のたびに一連の儀式をとおして集められ、専用の小屋が建てられ、そして何よりも外側の皮膚にあたる彫像の表面に白・赤・黒の顔料が塗り直されるプロセスのなかで、名を残した偉大な首長のウーネが宿ると見なされていた可能性が浮かび上がる。

二　ウリ像の収集時期

クレイマーは聞き取りのなかで、海岸線と内陸山地の間にあったカナゴット（Kanagot）村のラバンゲ（Lavangge）という人物が初めてウリ像を創り、その技が内陸の村々をまたいで歴代の彫刻師に伝承され、自身のインフォーマントとなったラカムへ受け継がれてきたという伝承を記録し、その系譜の長さから「少なく見積もっても一五〇年以上にわたってウリ像が製作されてきただろう」と記している（Krämer 1925:59）。ただし、その推計を裏付ける証拠はない。慶應義塾大学所蔵のウリ像から剥がれ落ちた小木片の年代測定分析を行ったところ、BP138±18年（δ^{13}C補正値）という結果をえたが、この付近の年代値に対応する暦年較正曲線は入り組んでいるため、誤差範囲が一七世紀後半から二〇世紀中葉と大きくなってしまう（図3）。年代測定資料がこれから増えたとしても、ウリ像製作の上限時期を特定することはやはり難しい。

しかし、収集時期についてはいくつか情報が得られるから、それらを手掛かりに慶應義塾所蔵資料の来歴にもかかわる収集の現場の様相を検討することはできる。二五五体あると言われるウリ像のうち（Gunn & Peltier 2006:172）、これまでに八〇点については画像を確認した（付表）。クレイマーの報告書、展示図録やオセアニア造形物の写真集、サザビーズやレンパーツ等のオークション資料、ウェッブ上で公開されている博物館・美術館収蔵品のデジタル資料、その他のインターネットサイトから情報を集成するとともに、二〇一四年一〇月九日～一二日にかけてシカゴ・フィールド博物館で行った資料調査で一五体のウリ像を確認し、慶應大所蔵資料とあわせて一八体を実見できた[4]。

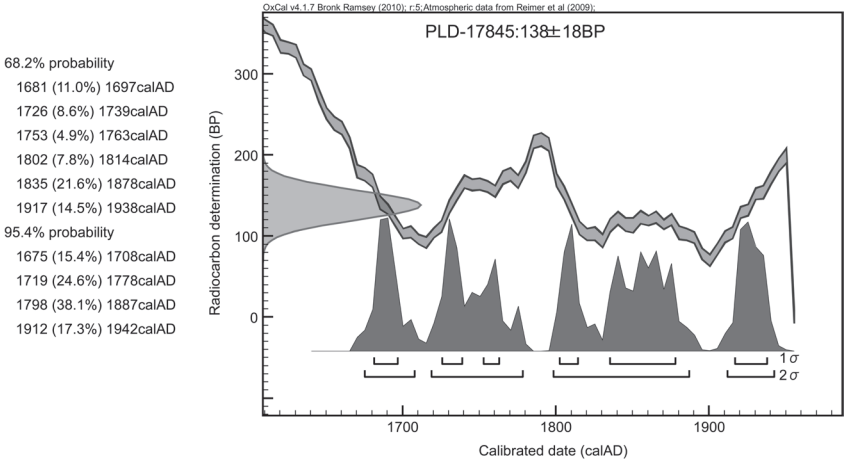

図３　ウリ像の較正年代

これらのウリ像を対象におこなった収集時期の推定は、二種類の情報に依拠した。一つは博物館への収蔵時に残された記録で、図録等の記載から分かることがある。もう一つは現地収集者にかかわる情報である。ニューブリテン島ヘルベルトヒョヘ（Herbertshöhe）を拠点とした独領ニューギニア総督のハール（Albert Hahl）、ニューアイルランド島に開設された総督府支庁の駐在官ボルミンスキー（Franz Boluminski）やウォストロック（Wilhelm Wostrack）、南洋貿易で発展したヘルンシェイム商会のティエル（Max Thiel）、北ドイツ・ロイド海運の現地航路船長ナウアー（Karl Nauer）、農園主のクロッケンバーガー（Arthur Krockenberger）、民族学者のクレイマー、植物学者のシーガー（Herman Seeger）、ドイツ植民地局による独領ニューギニア調査隊に参加した表現主義芸術家のノルデ（Emile Nolde）、そしてシカゴ・フィールド博物館のルイス（Albert Lewis）に造形物を販売した小嶺磯吉、その事業を手伝った鮫島三之助らがウリ像の収集者として知られている（付表）。

彼らの現地赴任時期と博物館への寄贈時期が判明している収集事例についても情報を取りまとめることによっ

て、ウリ像三四体の収集時期が推定できた（付表）。その結果、特に一九〇〇年から一九一三年までに集中することを確認した。二〇世紀初頭のこの一〇年余りは、まさに独領ニューギニアの植民地支配と植民地経営が確立した時期で、ニューアイルランド島でも島民を取り巻く状況が数年のあいだに急激に変化した。そこで、ウリ像の収集に交差した多様な立場や思惑を析出するために、近年いちじるしく進展したビスマルク群島のコロニアルヒストリー研究や博物館の近代史研究を以下に概観する。

三　フランツ・ボルミンスキーの植民地経営

西欧との接触は一七世紀初頭にさかのぼる。早くも一六一六年には、ル・メールとスハウテンらが乗船する帆船エンドラクト号にニューアイルランド島民のカヌー八艘が接近し、投石で突然襲ってきたことが記録に残る。一八世紀には、太平洋の探検航海で名を残したタスマンやダンピイア、カートレット、ブーゲンビルらが同島を訪れている（Gifford 1974:21; Gunn 1997:42）。一九世紀に入ると、欧米の海軍輸送船や商船、捕鯨船がビスマルク群島の周辺海域で活動しており、現地島民らとのあいだでバーター交易がすでに行われていた。たとえば、一九世紀前半にニューアイルランド島沖で操業していた米国捕鯨船の乗組員らは、数個に切断した古い鉄輪と交換に食料や飲料水そして仮面を入手している（Rosman & Rubel 1998:37）[5]。

それでも、ビスマルク群島の海域で西欧との絡み合いが本格化したのは一八七〇年代に入ってからで、ミクロネシアと西ポリネシアで南洋貿易を展開していたドイツのゴッドフロイ商会やヘルンシェイム商会が、ニューブリテン島とニューアイルランド島のあいだに位置するデューク・オブ・ヨーク諸島（Duke of York Islands）に進出してからであった。一八八〇年代には、ドイツ皇帝ヴィルヘルム一世から現地の司法権と占有権を与えられたニューギニア商会（Neuguinea Kompagnie）がニューギニア本島東端ヒュオン岬のフィンシュハーフェン（Finschhafen）に交易所を設け、コプラやナマコ、貝ボタン用シロチョウガイなどをバーター交易で仕入れたり、プランテーション労働者を独領サモアへ送り出していた（Moses 1969:45）。

一八八八年にヴィルヘルム二世がドイツ皇帝に即位して実権を握り、帝国主義的対外政策を進めていくなかで、一八八四年にイギリスとの協議を通して獲得していた北

東ニューギニアならびにビスマルク群島の植民地経営にドイツ国政府が直接乗り出すことになった。いわゆる独領ニューギニアと呼ばれる保護領で、一八九九年にはニューブリテン島東端のヘルベルトヒョヘに総督府が開設された。現在のココポ（Kokopo）で、ラバウルからは二〇kmほど南東に位置する。一九〇二年に総督に就任したハールは、その二年前にニューアイルランド島北端に開かれていたカビエン支庁（Kawieng）と、一九〇四年に開設された南部東海岸のナマタナイ支庁（Namatanai）を拠点に植民地経営に着手し、各集落の有力者をルルアイ（*lulual*）と呼ばれる村長に任命して間接統治の体制を整えていった（Moses 1969:55）。カビエン支庁はボルミンスキー、ナマタナイ支庁はウォストロックにそれぞれ任された。

一九〇〇年に一足先にカビエン支庁を開いていたボルミンスキーは、独領ニューギニアで初めて人頭税を導入し、さらに道路網を整備したことで植民地経営の手腕が本国でも評判となった人物である。カビエンからナマタナイまで、東海岸沿いに一九三kmのびる道路は、彼の名にちなんで現在ボルミンスキー・ハイウエイと呼ばれている。人頭税は一人五マルク／年で、導入初年の一九〇七年に二万マルク集めたことをボルミンスキーは誇っている（Buschmann 1996:200）。良く知られるように、人頭税は賦役と表裏一体の政策で、納税した島民は強制労働を免除される一方で、植民地政府や外国人、納税した有力島民のために一〇ヵ月の労働に従事した者は人頭税を免除された（Moses 1969:56-57）。これらの政策をとおして、一九〇七年以降に貨幣経済が現地社会に急速に浸透していったと考えられる。

四　造形物への学術的関心と博物館の獲得競争

ビスマルク群島の造形物は、早くも一八三〇年代にイギリスやオーストラリアの博物館へ寄贈され始めていたが、収集活動と博物館の所蔵が本格化するのは一八六〇年代以降である[6]。

ハンブルグ出身の「南洋貿易王」ゴッドフロイ（Johann Cesar VI Godeffroy）は自然標本や造形物の「珍品」収集にも熱心で、現地に派遣した商船船長や社員に収集品を持ち帰らせていた（Rosman & Rubel 1998:37-38）[7]。一八七四年にデューク・オブ・ヨーク諸島に交易所が置かれてからは、ビスマルク群島の造形物も加わった。収集品はハンブルグの「ゴッドフロイ博物

館」に収蔵された。その管理は、自然史学者だったグラーフ（Eduard Graeffe）や、後にライデン博物館の館長となったシュメルツ（Johann Schmeltz）らが担当した。特にシュメルツは資料の図面化を進めるとともに、有名大学や自然史系博物館の学者に解説文の寄稿を依頼してカタログを作成しているから、遅くとも一八七〇年代にはビスマルク群島の造形物が西欧の民族学界に広く知られていたと考えてよい（Kruger 2013:12）。ゴッドフロイ商会が一八七九年十二月に資金繰りに行き詰まって倒産すると所蔵資料も散逸し、ライプチヒ、ハンブルグ、ベルリン、ヒルデスハイム、ライデンの各博物館へ売り渡されていった（ibid.:13）。

もう一人の貿易商ヘルンシェイム（Eduard Hernsheim）も、ニューアイルランド島北端沖に浮かぶヌサ（Nusa）に設けた交易所で造形物を収集していた人物である。そのなかにはマランガン儀礼の仮面や彫像が含まれており、一八八〇年にはその一部をライプチヒ民族学博物館に寄贈している（Rosman & Ruble 1998:39）[8]。

ドイツ海軍省が一八七四～七六年に実施した軍艦ガゼル号による世界周航の途上でも、ビスマルク群島で数多くの造形物が収集され、ベルリン王立民族学博物館に寄贈された（Buschmann 1996:186）。ベルリンでは、一八六八年に別館として民族学博物館が設立され、ドイツ民族学の草創期を牽引したバスチャン（Adolf Bastian）が館長を務めていた。オーストラリア、南北アメリカ大陸、アフリカ大陸、インド、中国、中央アジア、東南アジア、そしてオセアニアと世界各地を実見していたバスチャンは、その経験からすべての人間集団に共通する「根本的思考」（Plischke 1953）、すなわち「人間精神の単一性」を探求しており（Koepping 1983）、「未開社会」のメラネシアからもたらされた精緻なマランガン彫刻をその証左として称揚した（Buschmann 2007:305）。もちろん伝播論的視点からバスチャンの説に懐疑的な民族学者が多かったが、ビスマルク群島の造形物自体への関心は急速に高まっていった（Buschmann 1996:189-190）。

ルシャン（Felix von Luschan）はその担い手の一人である。一八八六年からバスチャンの助手としてベルリン民族学博物館に所属し、一九〇五年にバスチャン亡きあと館長となり、オセアニアとアフリカのコレクション充実を精力的に進めた。ドイツ国主導の調査探検隊ばか

りでなく、政府関係者や個人旅行者が保護領で得たすべての民族資料をベルリン民族学博物館に寄贈させる連邦議会の法令がルシャンの活動の後ろ盾となった(ibid.:195-196)。その対抗馬となったのが、シュトゥットガルトのリンデン(Karl Graf von Linden)である。一八八九年にヴュルテンベルグ貿易地理協会の代表となり、独領ニューギニアからの一大コレクションを形成した人物で、それらは現在リンデン博物館に所蔵されている。形式主義的で高圧的なルシャンとの対比で、熱心で謙虚なリンデンの人柄ゆえに現地収集者のあいだで人気が高かったようだ。さらに、現地収集者らには名目的にヴュルテンベルグ王室に寄贈するよう依頼することによって、連邦議会が出した法規制をかわしながらコレクションを拡大していった(ibid.:192)。

ベルリンのルシャンとシュトゥットガルトのリンデンの競争に、一八九九年からライプチヒのボイレ(Karl Weule)が加わった。ボイレはもともとルシャンの助手だったが、ドレスデンのコレクターとして知られていたクレム(Gustav Klemm)のコレクションを核に創設されたライプチヒ民族学博物館にキュレーターとして雇われると、それまでの経験を活かしてビスマルク群島の造形物コレクションを形成していった。また、ハンブルグ民族学博物館が八〇万マルクという巨費と独自の蒸気船を手配して一九〇八〜〇九年に数か月間の収集調査を計画すると、それに対抗してブレーメン民族学博物館やミュンヘン民族学博物館がロイド海運の現地船長ナウアーに接触して、多くの造形物を購入し始めた(Buschmann 2000)。こうして、ビスマルク群島の造形物をめぐる獲得競争が二〇世紀に入ると急速に熱を帯びていったのである。[9]

五　現地収集者の目論見

博物館キュレーターたちのせめぎ合いは、当然のことながら独領ニューギニア駐在の収集者にとっても無関係ではなかった。現地収集者には多様な立場や目論見の持ち主が認められる。たとえば、ニューアイルランド島北部カビエン支庁の現地駐在官だったボルミンスキーは植民地に赴任した役人の常で、高い等級の勲章を授与されて名を残すことに強く執着した人物だった。一九〇三年にベルリンとシュトゥットガルトへ数多くの造形物を寄贈した目論見はここにあった。この時はヴュルテンベルグから低等級の勲章しか入手できなかったが、ルシャン、

リンデン、ボイレらのせめぎ合いをしたたかに利用しながら、一九〇九年までに少なくともプロイセン王室から赤鷲勲章（Roter Adlerorden）、ザクセン王室から勲一等騎士十字勲章（Ritterkreuz I）をそれぞれ授与されている（Roseman & Ruble 1992:42; Buschmann 1996:196）。

貿易商のなかには早くから商品価値を造形物に嗅ぎ取っていた人物がいた。エドワード・ヘルンシェイムは入手した造形物を商売抜きで一八八〇年にライプチヒ民族学博物館へ寄贈したが、その弟のフランツ・ヘルンシェイム（Franz Hernsheim）は、兄のコレクションを集成した「南洋の珍品コレクション写真カタログ」を一八八二年に販売目的で大英博物館に送付している（Roseman & Ruble 1998:39）。太平洋におけるヘルンシェイム商会の経営権を一八九二年に譲り受けた甥のティエル（Max Thiel）は、造形物収集の専従員を雇い入れることによって一九〇二～〇四年にかけて数千点にのぼる造形物を入手し、ビスマルク群島からの「最大にして最後のコレクション」と銘打って二万マルクで売りに出した。ドイツのいくつかの博物館が競り合った末に、ハンブルグ民族学博物館によって落札されたことが分かっている（Buschmann 1996:202）。

独領サモアでゴッドフロイに雇われていたファレル（Thomas Farrell）もまた、造形物売買で経済的利益を上げた人物である。南洋貿易とプランテーション経営で「ニューギニアの女王エマ」と呼ばれたエマ・フォーサイス（Emma Fosayth）の内縁の夫で、学術的関心から精力的に収集活動を行ったパーキンソン（Richard Parkinson）とは義兄弟にあたる（Kruger 2013:16）。エマと出会ってすぐ、商売の新天地を求めたファレルは一八七九年にデューク・オブ・ヨーク諸島に渡り、ゴッドフロイ商会のもとで農園労働者の募集を請け負った。当初はニューアイルランド島の南部を中心に活動したが、競合するヘルンシェイム商会に対抗するため一八八四年には北部に進出した。労働者募集業の活動は各地の島民との関係構築に役立ち、それを活かして収集した造形物をオーストラリア博物館（シドニー）に売り渡した。そのなかには一三二点におよぶマランガン彫刻が含まれており、一八八〇～八七年のあいだの売り上げは、少なく見積もっても四五〇ポンドになったという（Barnecutt 2007）。

六　絡み合いのなかの小嶺磯吉

アドミラルティ諸島の黒曜石製槍・ダガー、貝製装飾品（*kaphkap*）、ニューアイルランド島のウリ像、マランガン彫刻、人形（ひとがた）石灰彫像（*kulap*）など多数の造形物を集めた小嶺磯吉もまた、博物館キュレーターと現地収集者とのあいだの絡み合いやせめぎ合いのなかにいた。一九一〇年の段階で小嶺は三千点以上の造形物を所有しており、ロイド海運のナウアー船長やヘルンシェイム商会を介してコレクションの売却先を探していた（Welsch 1998 : [2] 98）。ライプチヒ民族学博物館のボイレも購入に動いていたが、米国シカゴのフィールド博物館から派遣された若き人類学者ルイス（Albert B. Lewis）が一足早く二千ドル強で手に入れている。[10]

小嶺磯吉はもともと肥前島原堂前村の生まれで、一八九〇年にはシロチョウガイやタカセガイといった貝ボタン素材の潜水漁で一旗揚げるためにトーレス海峡の木曜島に渡った。[11] 明治期以降の日本人の南洋移民史をまとめた岩本の論考を参照すると、独領ニューギニアにおける小嶺の活動は以下のようにまとめられる（Iwamoto 1999）。

商才に長けた小嶺は木曜島で小型スクナー船をすぐに入手し、日本人移民のための新天地を求めてニューギニア近海を探索していた。オーストラリア連邦政府による移民者の自由と権利の大幅な制限や、過剰採取による木曜島近辺の漁獲量減少が要因と考えられる（cf. シソンズ 1974）。独領ニューギニアのハール総督の日誌から、ニューブリテン島東端のヘルベルトヒョヘ（ココポ）に小嶺が現れたのは一九〇二年だったことが分かる。オーストラリアやイギリスの保護領と異なり、独領ニューギニアでは名目的にせよ日本人移民に西欧人と同等の身分が与えられていたことが、小嶺を惹きつけたのかもしれない。[12] ただし、土地の自由売買は認められず、借地契約にも制約があったため、小嶺はスクーナー船を活かしながらハール総督やヘルンシェイム商会の仕事を請負い、ニューアイルランド島やアドミラルティ諸島で島民らとの直接交渉、武装解除、交易所の開設などで活躍した。一九〇三年には、ニューアイルランド島南部のナマタナイに支庁を開設するため、ハール総督の探査にも同行した。

翌一九〇四年には、ナマタナイの沖合に位置するタンガ諸島に警察隊を率いて赴き、村落間の諍いをおさめ、

現地島民の武装解除に成功した。一九八〇年代にタンガ諸島の調査をおこなった人類学者フォスターは、その様子を伝えるインフォーマントに出会っている。その伝承は、タンガの人々が西欧の外圧に屈したのではなく、彼ら自身が小嶺の任務を可能にした筋立てになってはいるが、和平の提案を受け入れ、大量の槍を差し出し、小嶺が男たちに贈った小箱の代わりに皆がブタを持ち寄って祝祭を催し、何名かの有力者がルルアイ（村長）に任命されたことが語られる（Foster 1987:60-61）[13]。おそらくは、こうした現場でのやり取りをとおして小嶺はニューアイルランド島東海岸の村々と関係を構築していったのだろう。

一九一〇年には、ヘルベルトヒョヘから北に六〇〇km離れたアドミラルティ諸島に一千ヘクタールの借地権を認められ、ヘルンシェイム商会から独立した小嶺自身の交易所をマヌス島北海岸に開設した。一九一一年ごろに撮影された写真には、建造中も含め六棟の建物と見張り台が写っている（Welsch 1998:[I] Fig6.58）。画面左下には、剥ぎ取られたココヤシの外果皮が数多く散乱しているから、すでにコプラを取り扱っていたと考えられる。同時期には、マヌス島周辺でのシロチョウガイ（真珠母貝）の採捕許可を取付け、さらにヘルベルトヒョヘでも造船業等の商売を始めていた[14]。ちょうどそのころ、一九一一年一〇月に小嶺の前に現れたのがシカゴ・フィールド博物館のルイスである。

一八九三年に設立された新興のフィールド博物館では、二代目キュレーターのドーシー（George A. Dorsey）によって世界各地の民族資料収集が進められていた。ドーシーは一九〇八年七月九日から一ヶ月ほど独領ニューギニアを踏査しており、彼の助手として採用されたルイスも一九〇九年から四年間にわたってメラネシア全域の調査に従事した。ワシントンのスミソニアン博物館やニューヨークのアメリカ自然史博物館といった老舗への対抗として、価値のある「珍奇な」民族資料の獲得をフィールド博物館の理事や後援者が望んでいたからである（ivid.:[I] 3）。ただし、ハーバード大学で人類学博士号を取得したドーシーや、ボアズの弟子でコロンビア大学から博士号を得たルイス自身には学術的な目論見があった。二〇世紀初頭の米国人類学界では、世界中の人間集団や文化的特徴は伝播や移住あるいは進化によって分岐してきたものと想定され、文化要素の比較から単一の祖形を復元するために「民族誌的過去（ethnographic

past）」の収集と保存が急務と考えられていた（Gosden & Knowles 2001:77-78）。ドーシーがルイスをメラネシアに派遣した理由は、失われつつある資料を手遅れになる前に入手するためだったのである。[15]

一九〇二年からドイツ総督府や貿易商会の仕事を請負うなかで、博物館キュレターのあいだの収集競争と、それをしたたかに利用して名誉や利益を得る現地駐在者を小嶺は間近に観察し、自身もその絡み合いに加わっていった。ルイスもまた米国内の博物館のせめぎ合いを背景に派遣され、ドイツの民族学博物館の収集競争に一〇年ほど遅れての参入だったが、小嶺が八年間で集めた造形物三千点余りを頃合い良く一括入手できたことになる。そのなかにはウリ像も含まれていた。現在のフィールド博物館には一五体のウリ像が所蔵されており、そのうち一九一三年収蔵の資料が一三体あることを資料調査で確認できた。これらは、ルイスが小嶺から購入したウリ像と考えられる。[16]

七　ウリ像を収集「できた」小嶺磯吉とボルミンスキー

人類学や民族学の専門教育を受けてから独領ニューギニアに派遣された研究者は、ドーシーやルイスの他にもいた。現地収集者との関係をこじらせてしまったベルリン民族学博物館のルシャンは一九〇三年以降、独領ニューギニアの造形物が入手しづらい状況に陥っていた。造形物の由来や意匠の意味にかかわる正確な情報を現地収集者に望めない状況にも限界を感じていたルシャンは、専門教育を受けた若手の民族学者を現地に派遣しはじめた。一九〇六～〇九年には、ウィーン大学を卒業したトゥエンバルド（Richard Thurnwald）がアドミラルティ諸島をはじめビスマルク群島北部やソロモン諸島を幅広く踏査して資料収集をおこなった（Welsch 1998 : [II] 158）。しかし、カビエン支庁のボルミンスキーやヘルンシェイム商会のティレルらにはほとんど相手にされず、ニューアイルランド島の造形物についてはルシャンの期待に応えられなかったようである（Buschmann 1996:194）。

ルシャンはまた、一九〇七～〇九年にドイツ海軍と連携して学術調査隊（Deutsche Marine-Expedition）をビスマルク群島に送った。クレイマーが後半を率いた調査隊である。前半を率いたのは海軍軍医のステファン（Emile Stephan）で、出発前にベルリン民族学博物館で

調査手法や造形物収集の訓練を受けている[17]。当初はニューブリテン島を予定していたが、植民地の正確な人口把握を望んだハール総督の強い要請もあって、ニューアイルランド島が調査地となった（Buschmann 2003:246）。調査隊はまずカビエンに赴き、そこでボルミンスキーから歓迎を受けた。しかし、調査支援の見返りとしてルシャンが赤鷲勲章の授与を直後に手配したところを見ると（Buschmann 1996:196）、現地駐在者の協力なしにニューアイルランド島で価値の高い造形物を入手することは困難だったにちがいない。

ドイツ海軍調査隊の本隊はステファンに率いられて南東海岸のムリアマ（Muliama）を調査拠点としたが、地理学者のウォールデン（Edgar Walden）はカビエンに残り、マランガン儀礼の調査を行った。一九〇七年一二月一八日付のウォールデンの調査日誌には、マランガン彫刻の収集を勝手におこなわず、すべて任せるようボルミンスキーにくぎを刺されたことが記されている（Buschmann 1996:200）。このことから、ニューアイルランド島北部での造形物収集に関して、ボルミンスキーが現地島民との直接取引を一手に独占しようと目論んでいたことが分かる。

そのボルミンスキーが特に警戒していた人物の一人が小嶺磯吉である。一九〇六年一一月二四日付でリンデンに送った書簡のなかで、ヘルベルトヒョへから定期的にやってくる日本人の船がニューアイルランド島から造形物を持ち去っていることに脅威を感じ、「全域をくまなく見回り、残ったものを守るために高い値を（現地の人々に）提示した」と書き送っている（ibid.:204）。現地駐在者のあいだでも利害がせめぎ合い始めると、より珍奇な造形物を探索するだけでなく、現地交渉に慣れた他の収集者が同様の造形物を獲得できないよう画策していた様子が浮かび上がる。いずれにしても、一九〇〇年以来カビエン支庁を拠点に植民地政策を現場で担ってきたボルミンスキーや、一九〇二年から交易所や支庁の開設のために現場で直接交渉を請け負ってきた小嶺磯吉は、調査のために来島した一時滞在の研究者や、活動範囲が独領ニューギニア全域に広がっていたため各地での交渉が短期間になってしまった収集者には、すぐには望めない関係をニューアイルランド島民とのあいだに築いていたと考えてよい（ibid.:203）。

すでに触れたように、一九世紀前半には独領ニューギニアの島民と西欧からの来島者とのあいだでバーター交

易が生じており、一九世紀終盤から二〇世紀初頭にかけては、現地にマーケットが立つほど取引の規模が拡大していた。[18] フィールド博物館のドーシーはニューギニア本島を踏査した際に、釣針や釣糸、ナイフ、米国製鉄斧（ハチェット）、鉋、鏡、顔料、腕輪、ガラスビーズ、綿布、タバコ、マッチなど、現地商店で事前に用意した物品で島民らと面白いように取引できたことを日誌に記している（Welsch 2000:162, 172）。ドーシーがその経験を「愉快」と感じた理由は、西欧では安価で取るに足らない安ピカ物で価値の高い南洋の造形物を手に入れることができたとの思いがあったからだが、我れ先に交換を求めてきた現地島民側にも同様の興奮があった可能性を想定しておかなければならない。バーター交易とは、貨幣といった外的共通基準によって双方の交易品の価値が計られるのではなく、交渉のなかでそれぞれの思惑を調整することによって、自分のモノを相手のモノと置換する交換形態だからである（Torrence 2000:109-110）。それゆえ、島民がもってきた交易品もまた、たとえば一九世紀初頭から西欧の物品が流入したことによって不用になったモノや、すぐ作り直せるモノ、大量に製作できるモノだったかもしれないのである（Gosden & Knowles 2001:84; O'Hanlon 1993）。

この点で、ルイスの経験は示唆的である。彼の調査日誌には、限られた種類ばかり押し付けてくる現地島民とのあいだでしばしば軋轢が生じたことを読み取れる一方で（Welsch 2000:156）、ニューブリテン島のある村では、造形物をいくつか手に入れた後でさらに良いものを探そうと目を逸らしたすきに、村の首長に何かを隠された出来事が記されている。[19] 村々にあるすべての造形物が交易品になったのではなく、相手によって簡単に交換できるモノとできないモノ、交換したいモノとしたくないモノが現地島民側にもあったことになる。

残念ながら、ウリ像をめぐるバーター交易のなかでボルミンスキーや小嶺磯吉が誰とどのような交渉を行っていたのか、具体的な情報は管見の限りない。しかし、小嶺の事業の一翼を一九一一年から担い、おそらくは造形物収集についても何らかの指南を受けたであろう鮫島三之助の交渉経験は興味深い（藤木 1939）。[20] 記録された語りによると、鮫島は一九二三年にニューギニア本島のセピック河下流域を訪れ、周辺十三ヵ村の合同祭祀に出くわし、そこで一体の木製女神像を見た。[21] その造形に魅せられた鮫島は、セピック方面に便船があるたびに現地有

表1　画像確認できたウリ像の収集者と点数（詳細は付表参照）

収集者名	点数
小嶺磯吉	13
Boluminski	9
Nauer	4
Wostrack	3
Krämer	2
Brown	1
鮫島三之助	1
Krockenberger	1
Nolde	1
Hahl	1
Thiel	1

記録から分かるウリ像の現地収集者のうち、一時的な滞在者として植物学者のシーガー（Conru 2013;pl203, 204）や芸術家のノルデ（Reuther 2008）の名があるが、フィールド博物館のルイスと同様に現地駐在者から購入した可能性が残る。ただし人類学者のクレイマーは別で、滞在期間は七ヵ月だが、ニューアイルランド島中部東海岸のラマソン村では、当時としては先進的な参与観察的調査を行った。ウリ像製作の村々が位置したレレト丘陵の内陸にも入り込んでいるから、そうした過程で直接交渉の機会があったと考えられる。そして、その他の収集者はすべてニューアイルランド島と関係した現地駐在者である。

可能性も含めて収集者情報を集計してみると、現地駐在者のなかでも小嶺磯吉とボルミンスキーはウリ像の収集点数が突出して多く、それぞれ一三体と九体にのぼる（表1）。ニューアイルランド島南部東海岸に一九〇四年に開設されたナマタナイ支庁の駐在官ウォストロックの収集ウリ像も三点、クレイマーの収集は二点確認できた。

ところで、ボルミンスキーに次いで多いのは一九〇五年にロイド海運のスマトラ号船長となったナウアーで、四体を数える。[22] スマトラ号は、ニューアイルランド島北力者たちへ贈物を送り、村人たちがラバウルへやって来たときはご馳走で歓待した。一九二六年の暮れにとうとう、鮫島のそれまでの貢献への礼として女神像を譲ってもらえることになったが、船に積み込んで全速力で出発すると、別れを惜しむ人々が一〇艘のカヌーに分乗して、泣き叫びながら二時間余りも伴走してきたという。個人や親族レベルで交換を判断できる交易品とは異なり、十三ヵ村の共有財だった女神像を入手するために、三年に及ぶ根回しと関係構築を鮫島は要したことになる。ニューアイルランド島中部マダックの村々で名を遺した偉大な首長たちのウリ像もまた、村落レベルの葬送儀礼のなかで確実に用いられていた二〇世紀初頭の段階では少なくとも、そうした造形物の一種だったと考えられる。

端沖のヌサ島とシンプソンハーフェン（現ラバウル）のあいだを結び、往路に郵便や日用品、渡航者、年季労働からの帰還者を運び、帰路はコプラや造形物を持ち帰っていた（Buschmann 2000:94）。こうした現地便船の船長は、その可動性と運搬能力によって多くの造形物を収集できたが、各地点の滞在は短時間だったため現地社会との直接交渉には限界があった。それゆえナウアーは、西欧の博物館などから依頼が入ると、各地に居住する駐在者から造形物を購入する仲買のような立場にあった。ナウアー収集とされるウリ像も、こうした取引で入手したものと考えられる。

もちろん、収集情報を今に伝えるウリ像は決して多くないから、断言はできない。それでも現地社会と関係が深かった人物ほど多くのウリ像を収集「できた」可能性が浮かび上がってくる。小嶺磯吉は、その関係を背景に現地社会と直接交渉し、所有するスクーナー船の可動性と運搬能力を活かしながら造形物の一大コレクションを形成した可能性が高い。そのなかに、シカゴ・フィールド博物館と慶應大所蔵のウリ像も含まれていたことになる。

八　まとめ―絡み合いの歴史的産物―

ウリ像は、ビスマルク群島ニューアイルランド島中部内陸のレレト丘陵で製作された造形物である。一九〇五～〇六年には、中部東海岸ラマソン村の首長の葬送儀礼のなかで、間違いなく現地の人々に用いられていた。その様子を聞き書きしたクレイマー以外に、ウリ像を用いた儀礼を観察・記録したのは、二一年後の一九二七年に同じラマソン村にいた宣教師のピーケルだけである（Peekel & Lamekot. 1935）。内陸の村々から複数体のウリ像が集められたラマソン村の事例が典型だったとすると、ウリ像が用いられる機会は、名を遺した偉大な首長のための盛大な葬送儀礼などに限られていたことになる。

ピーケル以降は内陸の村々が廃れてしまって、ウリ像の製作や使用にかかわる知識も一九三〇年代には消え去ってしまった。しかしウリ像自体は、南洋の造形物に魅了された世界の博物館や個人によって所蔵されてきた。その始まりは早くても一九〇〇～〇三年で、収集年代が推定できるほとんどの事例が二〇世紀初頭の一〇年余りに集中する。それは、独領ニューギニアの中心がニューギニア本島北東部からビスマルク群島に移行し、ニュー

ただし、村々の薄暗い男性小屋にウリ像を発見したとしても、誰もが直接交渉できたわけではない。おそらくは親族レベルをこえる村落共同体の共有財だったウリ像を入手するには、長期にわたって村々の有力者と良好な関係を築くことが必要だっただろう。ウリ像を収集できた人物に現地駐在者が名を連ねる点は、この点で示唆的である。彼らのなかでも、一〇体前後のウリ像を収集できた可能性のある小嶺磯吉とボルミンスキーは、植民地政策や植民地経営を現場で担いながら村々の有力者と親密な関係を構築していた人物である。奇しくも現地で亡くなった両者の葬儀に、多数の島民が参列したという逸話はそのことを物語っている。[24]

それでも、世界には二五五体のウリ像が所蔵されていると言われる。筆者が画像を確認できた資料だけでも八〇体を数えるが、その半数以上は収集者・収集時期ともに不明である。ニューアイルランド島では一九〇七年に人頭税が導入されて、貨幣経済が急速に浸透していったから、可能性としてはウリ像も貨幣獲得のための売り物になっていったのかもしれない。[25]二〇世紀初頭の一〇年余りのあいだにウリ像の収集の現場に生じたであろう激変を通時的に捉えるために、その造形的特徴や意匠自体

図４　クレイマーが撮影したウリ像制作の現場（Krämer 1925：23を転載）

アイルランド島でも北端と南部東海岸にドイツ総督府の支庁が開設された時期にあたる。植民地政策が内陸部にも広がっていく過程で、人目に触れる機会が少なかったウリ像でさえ西欧によって発見されたにちがいない。[23]

を絡み合いの歴史的産物としていかに析出できるだろうか。

クレイマーは、インフォーマントの彫刻師ラカムによるウリ像製作の様子を撮影している（図4）。そこに写るラカムの手には明らかに鉄製の手斧が握られ、左の上腕には小型のナイフが紐でとめられている。二〇世紀初頭のウリ像でさえすでに西欧との絡み合いが生み出した造形物なのである。一八八〇～一九一〇年に集められた多くのマランガン彫刻には、西欧の布や青色塗料（レキット・ブルー）、ガラスビーズ、ガラス瓶の破片などが意匠に使用されている（Barnecutt 2007:125）。鮫島三之助がおそらく一九一一年以降に入手したウリ像にも、黒の顔料のかわりに鮮やかな青が彩色されていて興味深い（天理大学・天理教同友社 1989）[26]。直接的な史料が限られた状況のなかで、ウリ像の形態特徴や意匠を詳細に検討する物質文化研究の手法によって、絡み合いの歴史に迫ることが次の課題である。

【謝辞】

本稿の内容は、二〇一二～一四年度に三田キャンパスで開講した「博物館美術館の現在」の講義ノートを発展させたものである。美学美術史の後藤文子先生、ローマ考古学の江添誠先生と、オセアニア考古学を専門とする山口が本講義を共同担当し、ウリ像を主要事例にしながら、博物館・美術館の所蔵資料の研究可能性について言い合って考えてきた。日本ではいまだ十分に根付いていない博物館人類学の枠組みについて刺激的な議論を毎回もつことができた。この異分野連携は、二〇一五年一月九日～二月七日に三田キャンパス図書館1F展示ギャラリーで開催された文学部創設一二五年記念企画展『語り出す南洋の造形：慶應大所蔵・小嶺磯吉コレクション』へと繋がり、一月一七日には『モノに響く声、モノが導く対話、人類学の想像』（日本文化人類学会関東地区研究懇談会共催）と題した公開シンポジウムを開らき、文化人類学との対話も実現した。その過程で、文学部長の関根謙先生、民族学考古学専攻の同僚である佐藤孝雄先生、安藤広道先生、渡辺丈彦先生、文化人類学の棚橋訓先生（お茶の水女子大）、深山直子先生（東経大）、渡辺文先生（立命館大）、深田淳太郎先生（三重大）、須藤健一先生（国立民族学博物館）、石田慎一郎先生（首都大）には大変お世話になった。また、資料整理や類例検索では、大学院生の臺浩亮君と卒業生の佐山ののさんに多大な助力を頂いた。ここに深く御礼申し上げます。

註

（1）慶應義塾の民族学研究を主導した松本信廣先生が中心となり、コレクションの図録として一九四〇年（昭和一五）に『ニューギニア土俗品圖集』が刊行されている。松江氏のご子息が塾生だった縁もあり、終戦直後に義塾

が所蔵することとなった。これらの資料の一部は、戦後三度の展覧会に出展されたことがある。国立近代美術館開催の『現代の眼―原始美術から』（一九六〇年）、読売新聞社が主催となり上野松坂屋で開かれた『文化人類の宝庫・ニューギニア芸術展』（一九六二年）、サントリー美術館の『原始美術』（一九七五年）である。

（2）ただし、カトリックの宣教師だったジェラルド・ピーケルは、五体のウリ像が用いられた儀礼を一九二七年にラマソン村で観察している（Peekel & Lamekot 1935）。

（3）アートのエイジェンシー性を論じるジェルは、そのなかでマランガン彫像を取り上げ、複雑な意匠が個人の諸権利に読み換えられ記憶されるとともに、そうした意匠が人々に何かを想起させる力に着目している（Gell 1998）。

（4）ウリ像の写真を掲載する展示図録・造形写真集には、岡（1960）、小林（2006）、東京新聞社（1969）、天理大学・天理教道友社（編）1989、Christensen（1955）、Conru（2013）、Gracq（2003）、Gunn（1997）、Gunn, M & P. Peltier（2006）、Kräamer-Bannow（W. Schmidt 英訳版、2009）、Reuther（2008）、Vatter（1926）がある。

（5）大英帝国海軍の輸送艦バッファロー号で一九世紀初頭にニューアイルランド島を訪れたケント船長夫人は、人骨（おそらくいずれかの長管骨）が下端に装着された槍を入手している（Rosman & Rubel 1998:36-7）。

（6）ビスマルク群島の収集品は、英国副弁務官のロミリー（Hugh Romilly）や宣教師のブラウン（Geroge Brown）、貿易商人のファレル（Thomas Farrell）らによって、早くも一九世紀前半にはイギリスやオーストラリアの博物館に寄贈され始めていたが、この地域の造形物が西欧世界に広く知られるようになったのはドイツの保護領になってからであった（Conru 2013:52）。

（7）ゴッドフロイ六世は南洋貿易に革新をもたらした人物で、一九世紀後半にヤシ油の世界的需要が急増するなか、ココヤシのプランテーション栽培をサモアでいち早く開始するとともに、刳り出したココナッツの内果を乾燥させたコプラの生みの親でもある。この技術革新によって、日持ちの良いコプラを安い輸送コストで運搬することが出来るようになった（Kruger 2013:13）。

（8）英国副弁務官のロミリーは、一八八三年にニューアイルランド島北東海岸のカプス（Kapsu）で「おどろおどろしい彫像」や「へんてこな被り物」を見つけ、それらのマランガン彫刻を入手した。南洋の造形物を商うマーケットがすでにシドニーにあることをロミリーは知っていたからである。ベッドフォードのドュークというロミリーの遠縁が、五〇体余りの彫刻をすべて購入した（Rosman & Rubel 1998:38-39）。

（9）シカゴ・フィールド博物館のドーシー（George A. Dorsey）は、一九〇八年七月九日から一カ月ほどかけて、ニューギニア商会のブーツ船長らとともにニューギニア本島をほぼ一周し、現在のマダンとインドネシアのあいだの七〇〇㎞の海域に点在する島々を踏査した。また、小型汽船サイアール号でセピック川を一二五㎞遡上する

探検にも参加している（Welsch 2000:159）。その過程でベルリン博物館が派遣した調査隊の三キャンプに出会っている。また、ハンブルグ民族学博物館が二年間チャーターしていた八百トンのペイホ号（S.S. Peiho）を訪れ、調査隊の隊員であふれかえっていた様子を日誌に残している。ソロモン諸島では、ニューヨーク博物館の依頼で造形物を収集していたイギリスの探検家たちに出会っている（ivid.:163）。

（10）ルイスのメラネシアコレクションは総数で四千点を越え、現地で撮影された写真は二千点近い（Welsch 1993:3）。ルイス・コレクションの多くは、現地駐在の収集者から購入したものが多く、小嶺磯吉もその一人である。記録によると購入先は二二人を数え、総額は七千ドルを超えている（Gosden & Knowles 2001:92）。なお、小嶺から購入した資料のうち、すでにルイスが収集したものと重複する四〇二点はオーストラリア博物館（シドニー）の資料一六七点と交換された（ibid.:93）。

（11）木曜島でのシロチョウガイ採捕業にはじめて日本人がかかわったのは一八七〇年代後半に遡るが、日本人労働者が多数来島したのは一八九三年以降である（シソンズ 1974:28）。したがって、小嶺磯吉の渡航はその直前ということになる。木曜島に渡るまでの小嶺磯吉の半生については、親族の赤沢八重子氏の私記に紹介されている（赤沢 1998:53-68）。

（12）ニューギニア本島のうち西側のオランダ領（現イリアン・ジャヤ）は東インドと一体的に経済運営され、南東部の英領ニューギニアはオーストラリアのクイーンズランドを商圏として発展できたが、本島北東部のカイザー・ウィルヘルムスランド（Kaiser Wilhelmsland）とビスマルク群島からなる独領ニューギニアは経済圏の辺境で、環境も過酷であったため開発には大きな困難がともなった（Henderson 1962:21-25）。日本人移民にたいする寛容さは、この状況のなかで勤勉な労働力の確保を求めた独領ニューギニア総督府の植民地政策だったと考えられる。

（13）タンガ諸島ではククライ（*kukurai*）と呼ばれた。

（14）小嶺商会の商売は第一次大戦後も拡大し、プランテーション経営が軌道に乗り、一九二〇年にはラバウルでもっとも裕福な人物として知られていたという。しかし、一九三四年には不況の波にもまれ、打ち続く欠損に事業整理の途上、同年一〇月三日に六九歳で亡くなった。

（15）シカゴでは、コロンブスのアメリカ大陸発見四〇〇周年を記念して一八九三年に万博が開催され、その人類学展示を核にフィールド博物館が設立された。展示の責任者はハーバード大学の著名な人類学者フレデリック・プットナム（Frederick W. Putnam）で、ドイツから渡ってきた若き人類学者フランツ・ボアズ（F. Boas）が助手として働いていた。ドーシーもまたプットナムを支えた助手の一人で、一八九六年にフィールド博物館に採用され、二年後には人類学部門の二代目キュレターに就任した（Gosden & Knowles 2001:77; Wlsch 2000:158-161）。フィールド博物館には、これらドーシーとルイス

のコレクションを中心にオセアニアの民族資料が多数収蔵されている。

(16) 二〇一四年一〇月九日～一二日にかけて、フィールド博物館収蔵庫でウリ像とカプカプ（貝製装飾品）の資料調査を実施した。確認できたウリ像のうち残りの二点は、一九〇九年収蔵のウリ像であった。年代から考えて一九〇八年に独領ニューギニアを踏査したドーシーに由来する資料と考えられる。一九一三年収蔵の一三体のうち一一体は、博物館の資料番号が連番であることから、少なくともこれらはルイスに由来すると考えられる。

(17) ステファンの他に、地理学者のウォールデン（Edgar Walden）、民族学者のシュラゲンフォーヘン博士（Otto Schlaginhaufen）、写真家のシーリング（Richard Chilling）が加わった。ステファンは一九〇八年五月二五日にマラリアで命を落とし、その代役としてクレイマーが調査隊を率いることになった（Mönter 2010:131-147）。

(18) 一八七〇年代後半から八〇年代初頭にかけて、現地駐在者や長期滞在者らは造形物のマーケットが形成されていたことを記している。この種のマーケットは、一八八〇年代初頭にニューアイルランド島東海岸を頻繁に訪れた労働者募集斡旋業者や貿易商人らによって大きくなっていった（Barnecutt 2007:124）。

(19) ドーシーに続き独領ニューギニアに派遣されたフィールド博物館のルイスは、一九〇九年一月に訪れたニューブリテン島南部内陸の村で、次のような経験をしている。「いくつかの造形物を譲り受け、それらが納められていた男子小屋のまわりを見渡しながら、女性小屋について訊ねた。というのも、まだ何か良いものがあるかもしれないと思ったからである。しかし、現地の人々が女性小屋はここから遠いと答えたし、私のガイドも女性小屋がどこにあるのか知らなかった。…ところが、男性小屋を離れてすぐ、一緒についてきた少年の一人が、男性小屋の脇の藪の向こうに女性小屋があると言ったので、村長にそこへ行きたいと訊ねた。自分たちだけで勝手に行って荒らすのではと、現地の人々に思われたくなかったからである。こうして、女性小屋に向かって私たちは歩き出した。勝手に入って村人たちを怒らせたくなかったので、女性小屋の中を外から覗こうと歩き回っている内に、古老の村長から気をそらしてしまった。彼を探したときには、すでに姿が見えなくなっていた。ついてきた少年は、女性小屋の反対側の入り口から村長が中に入り、何かをもって出てきて藪の中に消えたと教えてくれた」（Welsch 1998[1] 175）。

(20) 鮫島三之助は、海軍大将上村彦之丞の斡旋で、一九一一年から小嶺磯吉氏の事業に参画した。現地では、アドミラルティ諸島マヌス島でココヤシ栽培のための調査をおこない、一年ほどの間に島中の集落を巡り歩いた。その踏査の過程でバーター交換によって入手できた造形物は、小嶺磯吉のコレクションとともに売ったという。記録された語り（藤木 1939）では、シカゴ大学が派遣した専門家に約百点を一五〇〇〇米ドルで販売したとされている。しかし、その年代が大正二年（1913）であり、ル

イス・コレクションがフィールド博物館に収蔵された年にあたることを考えると、おそらくは鮫島の記憶違いであろう。鮫島がその後に収集した造形物は、昭和七年（1932）に岸本彩星童人（岸本五兵衛）に買い取られ、その際にアチックミューゼアムに所属していた藤木喜久磨によって鮫島の聞き取り調査が行われた。語りの記録は『ニウギニア其附近島嶼の土俗品』に収録され、また一部は『南方共栄圏の民藝』に再録されている。なお、岸本の南洋コレクションの大半は天理参考館へ寄贈され、現在に至る。

（21）天理参考館所蔵資料の図録『ひと・もの・こころ：パプアニューギニア』の資料解説によると、「セピク河中流域のイアットモイ族の村の精霊堂によく見られる」女神像に類似する彫像である（上村 1989:201）。

（22）ナウアーが船長を務めたスマトラ号甲板で撮影されたウリ像はもう一体あるから（Buschmann 2000: Fig.4）、総計で五体のウリ像を収集したと考えられる。ただし側面からの写真であるため、我われの確認画像との照合が困難で、付表には含まれていない。

（23）本文で触れたように、西欧による収集の歴史はマランガン彫刻の方が三〇年以上早い。西欧の民族学界で南洋の造形物への関心が高まったことを背景に、一八七〇年代にはドイツやオーストラリアの博物館へ寄贈され、販売されはじめていた。マランガン彫刻という珍奇な造形物をめぐる需要が拡大していくなかで、現地の村々では収集者との交易用に作り置きされていた可能性も指摘されている（Barnecutt 2007:125）。マランガンの儀礼は、ニューアイルランド島北部海岸線の村々やその沖合の島々で広くおこなわれる親族レベルの葬送儀礼だから、プランテーション労働者の募集や交易のために不定期にやってくる業者でもマランガン彫刻を発見する機会が多かったと想定できる。

（24）一九一三年に亡くなったボルミンスキーはニューアイルランドの土地に葬られた。彼の墓地は人々を引き付ける聖地となり、超自然的な力を帯びていると見なされた。ボルミンスキーの遺体は神話の中に取り込まれ、ニューアイルランドの景観の中で記憶されてきたという（Buschmann 1996:187）。昭和九年（一九三四）一〇月三日に六九歳で亡くなった小嶺磯吉の葬儀には、在留邦人や現地駐在の諸外国人はもとより現地住民が多数参列したという（サンデー毎日 一九三五年七月八日記事）。

（25）ロイド海運のナウアーは、ライプチヒ民族学博物館のサファート宛てに送った一九一一年五月二日付け書簡のなかで、現地収集者間の造形物取引が過熱して、わずか一年ほどのあいだにウリ像の価格が急騰したことを記している。たとえば、ニューギニア商会から農園管理を任されていたクロッケンバーガーは入手した三体のウリ像に五百マルクの法外な値段を付けていたが、一年後にはさらに一千マルクに値段を跳ね上げたという（Buschmann 2000:98）。

（26）レキット・ブルーと俗称される合成群青染料は、一八八〇年代初頭までにマランガン彫刻に用いられていた。

経年劣化と熱帯の過酷な気候による綿布の黄ばみを和らげるために使われた一種の漂白剤の転用である（Barnecutt 2007:125）。

参考文献

赤沢八重子　一九九八『くちなしの花：ある女性の戦中・戦後史』光人社

石森修三（編）　一九九九『南太平洋の文化遺産：ジョージ・ブラウン・コレクション』財団法人千里文化財団

岡正雄　一九六〇『図説：世界文化史体系・第2巻』角川書店

上村徹一 九八九「資料解説」天理大学・天理教同友社（編）『ひと・もの・こころ：パプアニューギニア』pp.183-225, 天理教同友社

岸本彩星童人　一九四三『南方共栄圏の民藝』造形藝術社

国立近代美術館（編）　一九六〇『現代の眼―原始美術から』

小林眞　二〇〇六『環太平洋民族誌にみる肖像頭蓋骨』里文出版

シソンズ、デイビッド C.S.　一九七四「1871～1946年のオーストラリアの日本人」『移住研究』10:27-54、海外移住事業団

天理大学・天理教同友社（編）　一九八九『ひと・もの・こころ：パプアニューギニア』天理教同友社

東京新聞社（編）　一九六九『世界民族美術展（Kunst der Völker der Welt, Ethnographische Ausstellung）』

藤木喜久磨　一九三九『子壽里庫叢書三編：ニューギニア其附近島嶼の土俗品』吾人

南の會同人　一九三七『ニューギニア土俗品圖集：上巻』南洋興發株式會社

南の會同人　一九四〇『ニューギニア土俗品圖集：下巻』南洋興發株式會社

Barnecutt, P.V. 2007. Thomas Farrell: trading in New Ireland. In S.Cochrane and M. Quanchi (eds.), *Hunting the Collectors: Pacific Collections in Australian Museums, Art Galleries and Archives*, pp.120-129, Cambridge Scholars Publishing, Newcastle.

Barnecutt, P.V. 2014. *Catalogue note in Sotheby's Tresors, Collection Frum.* (2014.12.5 http://www.sothebys.com/de/news-video/auction-essays/tresors-collection-frum/2014/07/wilhelm-wostrack-uli-figures.html)

Buschmann, R. 1996. Franz Boluminski and the wonderland of carvings: towards an ethnography of collection activity. *Baessler-Archiv, Neue Folge*, Band XLIV: 185-210.

Buschmann, R. 2000. Karl Nauer and the politics of collecting ethnographic objects in German New Guinea. *Pacific Art* 21/22: 93-102.

Buschmann, R. 2003. Colonizing anthropology: Albert Hahl and the ethnographic frontier in German New Guinea. In H. G. Penny and M. Bunzl (eds.), *Worldly Provincial-*

ism: German Anthropology in the Age of Empire, pp. 239-255, University Presses Marketing, Bristol.

Buschmann, R. 2007. Oceanic carvings and Germanic carvings: German ethnographic frontiers and imperial visions in the Pacific, 1870-1914. *The Journal of Pacific History*, 42(3): 299-315.

Christensen, E.O. 1955. *Primitive Art*. Thomas Y. Crowell Company, New York.

Conru, K. (ed.) 2013. *Bismarck Archipelago Art*. 5 Continents Edition, Milan.

Foster, R.J. 1987. Komine and Tanga: a note on writing the history of German New Guinea. *The Journal of Pacific History* 22(1): 56-64.

Gell, A. 1998. *Art and Agency: An Anthropological Theory* (electoric version for Kindle), Oxford University Press.

Gifford, P.C. Jr. 1974. *The Iconology of the Uli Figure of Central New Ireland*. Columbian University, PhD thesis in Anthropology.

Gosden, C. and C. Knowles. 2001. *Collecting Colonialism: Material Culture and Colonial Change*. Berg, Oxford and New York.

Gracq, J. 2003. *42 rue Fontaine : l'atelier, d'André Breton*. A. Biro, Paris.

Gunn, M. (ed.) 1997. *Ritual Arts of Oceania, New Ireland, in the Collections of the Barbier-Mueller Museum*. Musée Barbier-Mueller, Geneva.

Gunn, M and P. Peltier (eds.) 2006. *New Ireland: Art of the South Pacific*. Musée du quai Branly, Paris, and 5 Continents Editions, Milan.

Iwamoto, H. 1999. *Nanshin: Japanese Settlers in Papua and New Guinea, 1890-1949*. The Journal of Pacific History, Canberra.

Koepping, K-P. 1983. *Adolf Bastian and the Psychic Unity of Mankind: the Foundation of Anthropology in Nineteenth Century Germany*. University of Queensland Press, St. Lucia.

Krämer, A. 1925. *Die Malanggane von Tombára*. Georg Müller Verlag A.G., Munchen.

Krämer-Bannow, E. (translated by Waltraud Schmidt.) 2009. *Among Art-Loving Cannibals of the South Seas (Bei kunstsinnigen Kannibalen der Südsee)*. Crawford House Publishing, Adelaide

Kruger, K-J. 2013. Settlers, administrators, reserchers, and explorers: the history of collecting in the Bismarck Archipelago. In K. Conru (ed.), *Bismark Archipelago Art*, pp.11-41, 5 Continents Editions.

Küchler, S. 1992. Making skins: Malangan and the idiom of kinship in Northern New Ireland. In J. Coote and A. Shelton (eds.), *Anthropology Art and Aesthetics*, pp. 94-112, Clarendon Press, Oxford.

Küchler, S. 2002. *Malanggan: Art, Memory and Sacrifice*. Oxford, New York.

Meyer, A.J.P. 1995. *Oceanic Art*. Könemann, Köln.

Mönter, S. 2010. *Dr. Augustin Krämer: A German Ethnologist in the Pacific*. University of Auckland, Thesis. (http://www.etpisonmuseum.org/pdf/Dr.%20Augustin%20Kramer.pdf#search = 'M%C3%B6nter+Dr.+Augustin+Kr%C3%A4mer')

Moses, J.A. 1969. The German Empire in Melanesia 1884-1914, a German self-analysis. In *Second Waigani Seminar: the History of Melanesia*, pp.45-76. Research School of Pacific Studies, the Australian National University, Canberra, and the University of Papua and New Guinea, Port Moresby.

O'Hanlon, M. 1993. *Paradise: Portraying the New Guinea Highlands*. British Museum Press, London.

Peekel, P.G. and M.S.C. Lamekot. 1935. Uli und Ulifeier Vom Mondkultus auf New=Mecklengurg. *Archiv für Anthropologie* 23 (New Series): 41-75.

Plischke, H. 1953. Bastian, Adolf. In S-W. Otto, (ed.), *Neue Deutsche Biographie (NDB), Band 1*, pp.626-627, Duncker & Humblot, Berlin.

Reuther, M. (ed.) 2008. *Emil Nolde: Die Südseereise (The Journey to the South Seas) 1913-1914*. Nolde Stiftung Seebüll and DuMont Buchverlag, Köln.

Rosman, A. and P.G. Rubel. 1998. Why they collected: the history of artifact collecting in New Ireland. *Museum Anthropology* 22(2): 35-49

Torrence, R. 2000. Just another trader? an archaeological perspective on European barter with Admiralty Islanders, Papua New Guinea. R. Torrence and A. Clarke (eds.), *The Archaeology of Difference: Negotiating Cross-Cultural Engagements in Oceania*. pp.104-141, One World Archaeology 38, Routledge, London and New York.

Vatter, E. 1926. *Religiöse Plastik Der Naturvölker*. Ammain, Frankfurt.

Welsch, R.L. 1998. *An American Anthropologist in Melanesia: A.B. Lewis and the Joseph N. Field South Pacific Expedition 1909-1913, Volume 1: Field Diaries, and Volume 2: Appendixes*. University of Hawaii Press, Honolulu.

画像出処	類型[30]	H	W	D	備考
Gunn（1997：Fig. 94）；小林（2006：178）	Ia				
Krämer（1925：pl.13）；小林（2006：179）；Lempertz（2012）	Ia	155			Boluminski収集の可能性あり
Krämer（1925：pl.13）；小林（2006：178）	Ia				Boluminski収集の可能性あり
Krämer（1925：pl. 24）	II				小型ウリ像
Krämer（1925：pl. 24）	II				小型ウリ像
Gunn & Peltier（2006：178）	II	53	11.5	11.5	小型ウリ像
http://htq.minpaku.ac.jp/menu/database.html	II	59	13	13	小型ウリ像，ジョージ・ブラウン・コレクション；資料番号：H0144385
天理大学・道友社 共編（1989：pl.49）	II	65			鮫島三之助コレクション
Krämer（1925：pl. 24）	IIIa				小型ウリ像
Krämer（1925：pl. 24）	IIIa				小型ウリ像；ループ支柱有り
Krämer（1925：pl.32）；Gracq（2003：32）；Gunn & Peltier（2006：pl57）	Ia	140	60	50	Wilhelm Wostrack収集；Andre Bretonが入手したウリ像
Lempertz（2012）	Ia	127			Otto Dix（ドイツ人芸術家）旧蔵
Lempertz（2012）	Ia				ベルリン民族学博物館旧蔵
http://www.museum-folkwang.de/en/collection/archaeology-global-artapplied-arts.html；Conru（2013：53）；Lempertz（2012）	Ia				
Lempertz（2012）；Buschmann（2000：Fig.6）	Ia				Karl Nauerのスマトラ号甲板で撮影されたウリ像に酷似
Lempertz（2012）；Conru（2013：60）	Ia				Ernest Heinrich（ドイツ人コレクター）旧蔵
Lempert（2012）	Ia				Serge Brignoni（スイス人シュールレアリスト）旧蔵
Lempertz（2012）	Ia				
東京新聞社（1969：77）	Ia	116	24		
http://www.tomkinscollection.org/static/object_53.html	Ia				
Krämer（1925：pl.33）	Ia	130			Boluminski収集の可能性あり；Old and without colour
2014年10月10-11日撮影	Ia	130	33		資料番号：112388；左腕にバスケット有り（Krämer's Style 9）；彩色無し
2014年10月10-11日撮影	Ia	130	40		A.B. Lewis Collection；資料番号：138794；小嶺磯吉収集の可能性あり
2014年10月10-11日撮影	Ia	134	40		資料番号：144001
Krämer（1925：pl.29）；http://www.sothebys.com/de/news-video/auction-essays/tresors-collection-frum/2014/07/wilhelm-wostrack-uli-figures.html	Ib	130			Wilhelm Wostrack収集；リンデン博物館→Ernest Heinrich→Serge Brignoni→Murray Frum（カナダ人コレクター）

付表　ウリ像一覧

No.	資料名	現地名	収集時期 （現地撮影時期）	収集場所 （ニューアイルランド島内）	所蔵
1	装飾頭蓋付木製祖霊像				Barbier-Mueller Museum
2	装飾頭蓋付木製祖霊像	*Konombin?*	1900-1903年[1]		Linden Museum, Stuttgart
3	装飾頭蓋付木製祖霊像		1900-1903年[1]	南部内陸中央Lambuso	Linden Museum, Stuttgart
4	小型木製祖霊像	*evorok-moanu*	1908-1909年	中部Madak地方東海岸Lamasong?	
5	小型木製祖霊像	*evorok-moanu*	1908-1909年	中部Madak地方東海岸Lamasong?	
6	小型木製祖霊像	*evorok-moanu*		中部Madak地方	Saint Louis Art Museum
7	小型木製祖霊像	*evorok-moanu*	1875-1881年?[2]		国立民族学博物館
8	小型木製祖霊像	*evorok-moanu*	1923-1926年?		天理参考館
9	小型木製祖霊像	*evorok-moanu*	1908-1909年	中部Madak地方東海岸Lamasong?	
10	小型木製祖霊像	*evorok-moanu*	1908-1909年	中部Madak地方東海岸Lamasong?	
11	大型木製祖霊像	*uli*（*lembankakat egilampe*）	1908年以前	中部Madak地方東海岸	Indiana University Art Museum
12	大型木製祖霊像	*uli*			
13	大型木製祖霊像	*uli*			
14	大型木製祖霊像	*uli*			Museum Folkwang, Essen
15	大型木製祖霊像	*uli*	1905-1911[3]		Staatliches Museum für Völkerkunde, Munich
16	大型木製祖霊像	*uli*			Parke-Bernet Galleries, Stuttgart
17	大型木製祖霊像	*uli*			
18	大型木製祖霊像	*uli*			Naturhistorische Gesellschaft Nürnberg（Natural History Society Nuremberg）
19	大型木製祖霊像	*uli*			Rautenstrau-Joest-Museum-fur Volkerkunde（ケルン民族博物館）
20	大型木製祖霊像	*uli*			Tomkin Collection
21	大型木製祖霊像	*uli*（*lakiserong*）	1900-1903年[1]	中部Madak地方Malom	Linden Museum, Stuttgart
22	大型木製祖霊像	*uli*			Chicago Field Museum
23	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
24	大型木製祖霊像	*uli*			Chicago Field Museum
25	大型木製祖霊像	*uli*（*selambungin antelou*）	1904-1908年[5]	中部Madak地方Levinko	

画像出処	類型[30]	H	W	D	備考
Lempertz（2012）	Ic				Alfred Flechtheim（ギャラリーオーナー）旧蔵
2014年10月10-11日撮影	Ic	140	45		資料番号：112389
Krämer（1925：pl.25）；Gunn & Peltier（2006：pl.60）	II	72	14	16	Arthur Krockenberger（ドイツ人農園主）収集；Krämer報告書に現地名無し
Gunn & Peltier（2006：173）；http://commons.wikimedia.org/wiki/File：Statues_Uli_（mus%C3%A9e_de_Dahlem,_Berlin）.jpg	II	158	47	13	資料番号：VI55022；Hans Franke estate（Berlin）からの寄贈（1969）；サンゴブロック状の意匠の上に立つウリ像
http://commons.wikimedia.org/wiki/Category：Uli_figures	II				資料番号：6035.1
Gunn（1997：88）	II				資料番号：4313, ドイツ博物館→Serge Brignoni→Charles Ratton→Jay Leff
D'Alleva（1998：pl.76）；http://www.britishmuseum.org/research/collection_online/collection_object_details.aspx?objectId＝497354&partId＝1&searchText＝New+Ireland&images＝true&page＝1	II	101.6			資料番号：Oc1936,1123.1；A. Lockwoodからの寄贈（1936）
Krämer（1925：pl.25）	II				
Conru（2013：pl.203, 204）	II	108			Herman Seeger（ドイツ人植物学者）収集
http://www.sothebys.com/en/auctions/ecatalogue/2006/african-oceanic-and-pre-columbian-art-n08246/lot.238.html	II	97			Karl Nauer収集；Staatliches Museum für Völkerkunde（Munich）→Ludwig Bretschneider（Munich）→Julius Carlebach（New York）
2014年10月10-11日撮影	II	130	45		A.B. Lewis Collection；資料番号：138795
2014年10月10-11日撮影	II	105	35		A.B. Lewis Collection；資料番号：138796；小嶺磯吉収集の可能性あり
http://www.sothebys.com/en/auctions/ecatalogue/lot.64.html/2009/collection-guimiot-et-domitilla-de-grunne-d39art-premier-pf9025	II				Karl Nauer収集；Baudouin伯爵→Jacques Kerchache
Gunn & Peltier（2006：pl.58）	IIIa	150	55	50	Franz Boluminski収集；ループ状の支柱有
Gunn（1997：88）；Gunn & Peltier（2006：172）	IIIa				Alfred Buhler撮影（1931）
http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/310415	IIIa	132.1	40.6	34.9	資料番号：1977.455；Sarah d'Harnoncourt旧蔵
Krämer（1925：pl.30）	IIIa				
Krämer（1925：pl.32）	IIIa				ループ状の支柱有；Boluminski収集の可能性あり
Reuther（2008：20）	IIIa	86			Emile Nolde（ドイツ人芸術家）収集
2014年10月10-11日撮影	IIIa				A.B. Lewis Collection；資料番号：138798；小嶺磯吉の可能性あり
2014年10月10-11日撮影	IIIa				資料番号：144001

付表　ウリ像一覧（続き）

No.	資料名	現地名	収集時期（現地撮影時期）	収集場所（ニューアイルランド島内）	所蔵
26	大型木製祖霊像	*uli*			
27	大型木製祖霊像	*uli*			Chicago Field Museum
28	大型木製祖霊像	*uli*		中部Madak地方西海岸 Lemau	Linden Museum, Stuttgart
29	大型木製祖霊像	*uli*		中部Madak地方	Ethnologisches Museum, Berlin
30	大型木製祖霊像	*uli*			Honolulu Academy of Art
31	大型木製祖霊像	*uli*			Barbier-Mueller Museum
32	大型木製祖霊像	*uli*			British Museum
33	大型木製祖霊像	*uli*（*selambungin sonondos*）			Bremen
34	大型木製祖霊像	*uli*	1914年以前		
35	大型木製祖霊像	*uli*	1906-1912年		
36	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
37	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
38	大型木製祖霊像	*uli*	1906-1912年		
39	大型木製祖霊像	*uli*	1900-1913年[1]	中部Madak地方	musée du quai Branly
40	大型木製祖霊像	*uli*		中部Madak地方内陸 Malum	
41	大型木製祖霊像	*uli*		中部Mandak地方Barak	Metropolitan Museum Art
42	大型木製祖霊像	*uli*（*lembankakat sonondos*）			Bremen
43	大型木製祖霊像	*uli*（*ealandik*）	1900-1903年[1]		Linden Museum, Stuttgart
44	大型木製祖霊像	*uli*	1914年[6]		Nolde Stiftung Seebüll
45	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		
46	大型木製祖霊像	*uli*			

画像出処	類型[30]	H	W	D	備考
2012年11月撮影	IIIb	150	52	40	資料番号：ME10201；小嶺磯吉収集
Welsch（1998：）；2014年10月10-11日撮影	IIIb	165	58		A.B. Lewis Collection；資料番号：138790；小嶺磯吉収集
Gunn & Peltier（2006：pl.56）	IIIb	162	59		資料番号：45809, Albert Hahl（ドイツ総督）収集
http://commons.wikimedia.org/wiki/File：Kultfigur_nalik_Mandak_Museum_Rietberg_RME_431.jpg；Lempertz（2012）	IIIb				資料番号：431, Alfred Flechtheim（ギャラリーオーナー）→Eduard von der Heydt旧蔵
http://commons.wikimedia.org/wiki/Category：Dauerausstellung_Ozeanien_des_Staatlichen_Museums_f%C3%BCr_V%C3%B6lkerkunde_M%C3%BCnchen#mediaviewer/File：Figure,_New_Ireland_Island,_1913_-_Staatlichen_Museums_f%C3%BCr_V%C3%B6lkerkunde_M%C3%BCnchen_-_DSC08330.JPG；Buschmann（2000：Fig.5）	*IIIb*				Karl Nauerのスマトラ号甲板で撮影されたウリ像に酷似
Gunn（1997：88）；Gunn & Peltier（2006：172）	IIIb				Alfred Buhler撮影（1931）；髪飾り無し
Gunn（1997：88）；Gunn & Peltier（2006：172）	IIIb				Alfred Buhler撮影（1931）；髪飾り無し；ループ状支柱有り
Krämer（1925：pl.26）	IIIb				
Krämer（1925：pl.26）	IIIb				
Krämer（1925：pl.27）	IIIb				Boluminski収集の可能性あり
Krämer（1925：pl.27）	IIIb				
Krämer（1925：pl.28）	IIIb				
Trowell & Nevermann（1967：225）；http://en.wikipedia.org/wiki/Uli_figure	IIIb	145.1			Boluminski収集の可能性あり
2014年10月10-11日撮影	IIIb	144	36		A.B. Lewis Collection；資料番号：138788；小嶺磯吉収集の可能性あり
2014年10月10-11日撮影	IIIb				A.B. Lewis Collection；資料番号：138789；サイズ未計測；小嶺磯吉の可能性あり
2014年10月10-11日撮影	IIIb				A.B. Lewis Collection, 資料番号：138791；展示室資料；サイズ未計測；小嶺磯吉の可能性あり
2014年10月10-11日撮影	IIIb	147	43		A.B. Lewis Collection；資料番号：138793；小嶺磯吉の可能性あり
Brunt, P. & N. Thomas.（eds. 2012：198）；http://collections.australianmuseum.net.au/amweb/pages/am/Display.php?irn＝37403&QueryPage＝/amweb/pages/am/AdvQuery.php&history_depth＝-4&preferred_mm_irn＝17437	IIIb	142			資料番号：E024808

付表　ウリ像一覧（続き）

No.	資料名	現地名	収集時期（現地撮影時期）	収集場所（ニューアイルランド島内）	所蔵
47	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1934年[7]（1902-1911?）		慶應義塾大学
48	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]	中部Mandak地方内陸	Chicago Field Museum
49	大型木製祖霊像	*uli*	1904-1908[5]	中部Mandak地方	Linden Museum, Stuttgart
50	大型木製祖霊像	*uli*		中部Mandak地方	Museum Rietberg, Zürich
51	大型木製祖霊像	*uli*	1905-1911[3]		Staatliches Museum für Völkerkunde München
52	大型木製祖霊像	*uli*		中部Madak地方内陸 Malum	
53	大型木製祖霊像	*uli*		中部Madak地方内陸 Malum	
54	大型木製祖霊像	*uli*（*selambungin lorong*）			Bremen
55	大型木製祖霊像	*uli*（*selambungin lorong*）			Humburg（Hamburgisches Museum für Völkerkunde?）
56	大型木製祖霊像	*uli*（*selambungin lorong*）	1900-1908年[8]		Leipzig
57	大型木製祖霊像	*uli*（*selambungin lorong*）			Humburg（Hamburgisches Museum für Völkerkunde?）
58	大型木製祖霊像	*uli*（*selambungin lorong*）			Bremen
59	大型木製祖霊像	*uli*	1900-1903年[1]		Museum für Völkerkunde, Berlin（Franke Dahlem Museum of Ethnology）
60	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
61	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
62	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
63	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
64	大型木製祖霊像	*uli*	1917年以前	西海岸	Australian Museum, Sydney

画像出処	類型[30]	H	W	D	備考
http://commons.wikimedia.org/wiki/File：Figure_of_Uli,_New_Ireland_Island,_c._1913_Staatliches_Museum_f%C3%BCr_V%C3%B6lkerkunde_M%C3%BCnchen_-_DSC08574.JPG	*IIIe*				肩上と足横に副像を持つ事例
2012年11月撮影	IIIc	155	45	44	資料番号：ME10202；小嶺磯吉収集
http://www.tikiroom.com/tikicentral/bb/viewtopic.php?topic＝30080&forum＝2&vpost＝412503&hilite＝jon%20hall	*IIIc*	152			
http://www.new-guinea-tribal-art.com（New Guinea Tribal Art）	IIIc				
Gunn & Peltier（2006：172）	IIIc				photo taken by the Deutshe Marine-Expedition（1907-1909）
Krämer（1925：pl.30）	IIIc				Boluminski収集の可能性あり
Krämer（1925：pl.31）	IIIc				
2014年10月10-11日撮影	IIIc	135	41		A.B. Lewis Collection；資料番号：138792；小嶺磯吉収集の可能性あり
2014年10月10-11日撮影	IIIc				A.B. Lewis Collection；資料番号：138796；展示室資料；サイズ未計測；小嶺磯吉の可能性あり
2012年11月撮影	IIId	156	44	44	資料番号：ME10203；小嶺磯吉収集
Christensen（1955：297）；http://www.brooklynmuseum.org/opencollection/objects/65625/Figure_Uli	IIId	149.9	36.2	47	
Krämer（1925：pl.28）	IIId				Boluminski収集の可能性あり
Krämer（1925：pl.29）；Meyer（1995：352）	IIId				Wilhelm Wostrack収集
Vatter（1926：67）	Ib	142			Max Thiel収集
Krämer-Bannow（2009）	Ia	123			Krämer collection（調査時に収集）
Krämer-Bannow（2009）	IIIc				Krämer collection（調査時に収集）

督府の地域長官で、1913年に現地で没している。1903年には、ドイツのベルリン民族博物館とシュトゥットガルトのした。ブラウンが亡くなったときに手元に残っていた3166点のオセアニア民族資料のうち、80点がニューアイルラン館と関係を深めていった。1911年7月14日付でライプチヒ民族学博物館のE.サファートに送った手紙で、ミュンヘ資料の数を確認するとともに梱包した（Welsch1998：423）。小嶺自身は、1902年に独領ニューギニアの拠点ヘルベルトロック（ナマタナイ支庁長官）がNo.25のウリ像を収集した。同時期に、A.ハール（Hahl）やF.ボルミンスキーらをもつ。ニューアイルランド島北部のカベインに1914年3月に立ち寄っている（Reuther 2008）。
亡くなる1934年までビスマルク諸島で貿易商会を営んだ。1903年には、ニューアイルランド島東海岸中南部のナマタナマタナイ沖合のタンガ諸島で武装解除に成功し、大量の槍を押収した（Foster 1987；Iwamoto 1999）。ウリ像の収

付表　ウリ像一覧（続き）

No.	資料名	現地名	収集時期 （現地撮影時期）	収集場所 （ニューアイルランド島内）	所蔵
65	大型木製祖霊像	*uli*	1913年頃		Staatliches Museum für Völkerkunde, München
66	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1934年[7] （1902-1911?）		慶應義塾大学
67	大型木製祖霊像	*uli*			Hamburgisches Museum für Völkerkunde
68	大型木製祖霊像	*uli*			
69	大型木製祖霊像	*uli*	1907-1909年	中部Madak地方東海岸 Lamasong	
70	大型木製祖霊像	*uli* （*lembankakat lavatlas*）	1900-1908年[8]		Leipzig
71	大型木製祖霊像	*uli* （*lembankakat lavatlas*）			Humburg（Hamburgisches Museum für Völkerkunde?）
72	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
73	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1911年[4]		Chicago Field Museum
74	大型木製祖霊像	*uli*	1902-1934年[7] （1902-1911?）		慶應義塾大学
75	大型木製祖霊像	*uli*			Brooklyn Museum. New York
76	大型木製祖霊像	*uli* （*lembankakat lakos*）	1900-1903年[1]		Linden Museum, Stuttgart
77	大型木製祖霊像	*uli* （*lembankakat lakos*）	1904-1908年[5]		Linden Museum, Stuttgart
78	大型木製祖霊像	*uli*	1898-1911年[9]	中部Madak北海岸 Luasigi	Linden Museum, Stuttgart?
79	大型木製祖霊像	*uli*	1908-1909		Linden Museum, Stuttgart
80	大型木製祖霊像	*uli*	1908-1909		Linden Museum, Stuttgart

(1) F. ボルミンスキーは、1900 年にニューアイルランド島北部のカビアン（Käweing）に支庁を開設したドイツ総リンデン博物館にウリ像を寄贈した（Buschmann 1996；Roseman & Ruble 1998：41-42）。
(2) G. ブラウンはメソジスト伝道協会の宣教師として、1875 年から 1881 年までニューブリテン島で布教活動に従事ド島の資料であった（石森 1999）。ただし、No.7 のウリ像が 1875 ～ 1881 年に収集されたものか不明である。
(3) K. ナウアーは 1905 年からロイド海運スマトラ号の船長を務め、造形物の現地収集者としてドイツの複数の博物ン民族学博物館にウリ像を送付する予定であることを伝えている（Buschmann 2000：100）。
(4) A.B. ルイスは 1911 年 10 月に、小嶺からコレクションを直接購入するためにアドミラルティ諸島の交易所を訪ね、トショーヘ（現ココポ）に現れている。したがって、ウリ像の収集時期は 1902 年以降、1911 年以前となる。
(5) サザビーズによるフラムコレクションの解説文によると、1904 － 1908 年にレビンコ（Levinko）で、W. ウォスによって収集されたウリ像がストゥトゥガルドのリンデン（Linden）に寄贈された。
(6) 表現主義の芸術家だった E. ノルデは、ドイツによる医療・人口調査団の一員として南太平洋におもむいた経験
(7) 小嶺磯吉は 1902 年、スクーナーの船長としてニューブリテン島のヘルベルトショーヘ（現ココポ）に到着し、ナイ（Namatanai）にドイツ植民地政府支庁を設けるため、A. ハール総督に同行している。また、1904 年には

たことを記している。また、1908 年の初頭にはウリ像を含む 8 箱の民族資料を送付したと伝えている（Rosman &

シャル諸島からニューブリテン島マツピに移した。彼が収集した造形物は、ベルリン、ハンブルグ、ドレスデン、
られている（Roseman & Rubel 1998：40-48）。
特に、腕の位置と副像が基準となる。詳細は別稿に譲る。

集もこの時期に行われた可能性が高い。

(8) F. ボルミンスキーは、1907 年に送ったライプチヒ博物館への書簡の中で、「両性具有の並外れた木像」を寄贈し Rubel 1998：41-42)。

(9) M. ティエルは、Edward Hernsheim の甥で、1892 年にヘルンシェイム商会の経営権を受け継ぎ、その拠点をマーシュトゥットガルトの博物館に販売された。1911 年には、シュトゥットガルトのリンデン博物館にウリ像が送

(10) ウリ像は、マランガン彫刻に比べて様式化された造形物だが、それでもいくつかの類型に分けることができる。